



# 金剛輪寺三重塔

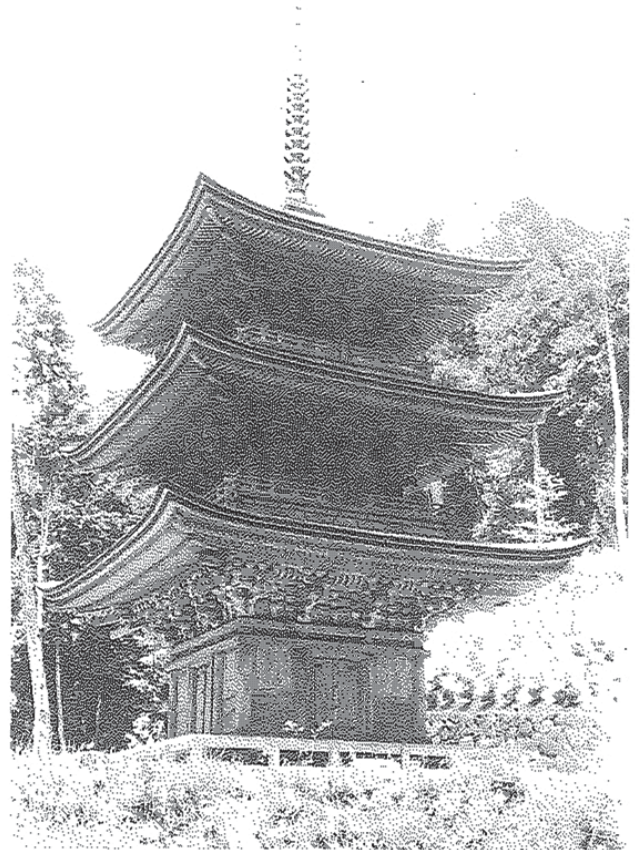
## はじめに

重要文化財に指定されている建造物は、神社、寺院、城、公共建築、民家あるいは橋や船など沢山の種類がありますが、中でも神社や寺院の建築は全国的に数多く指定されています。ここでは寺院建築の一つである塔について考えてみましょう。

釈迦によって始められた仏教は印度北部から中央アジア、西域諸国を経て中国に広まり、沢山の仏典は永年にわたって中国で漢字に訳され、わが国には6世紀の中頃に百済から入って来ました。日本書紀には欽明天皇13年壬申年(552)、百済の聖明王が仏像や経論をわが朝廷に献上したとあり、上宮聖徳法王帝説では戊午年(538)としていますが実際にはそれ以前から私的に伝わったと考えられています。当時の有力氏族である蘇我氏は積極的に仏教を信奉し、日本書紀には崇峻元年(588)飛鳥に法興寺(飛鳥寺)を作りはじめ、推古元年(593)には法興寺の柱の礎の中に仏舎利を納めたとあります。

わが国には古来からの神道があり、仏教をとり入れることには色々の磨擦や争いがありました。聖徳太子は深く仏教に帰依され、四天王寺や斑鳩寺などの大きな寺が建てられました。これらの建物は百済からもたらされた技術によって、礎石の上に柱を建て、屋根には瓦を葺き、柱などは赤く塗ったもので、この異国風の建物は、当時それらのものを受け入れるだけの文化水準はあったでしょうが、わが国の人々をびっくりさせたことと思われま

飛鳥寺の建物配置は発掘調査によって明ら

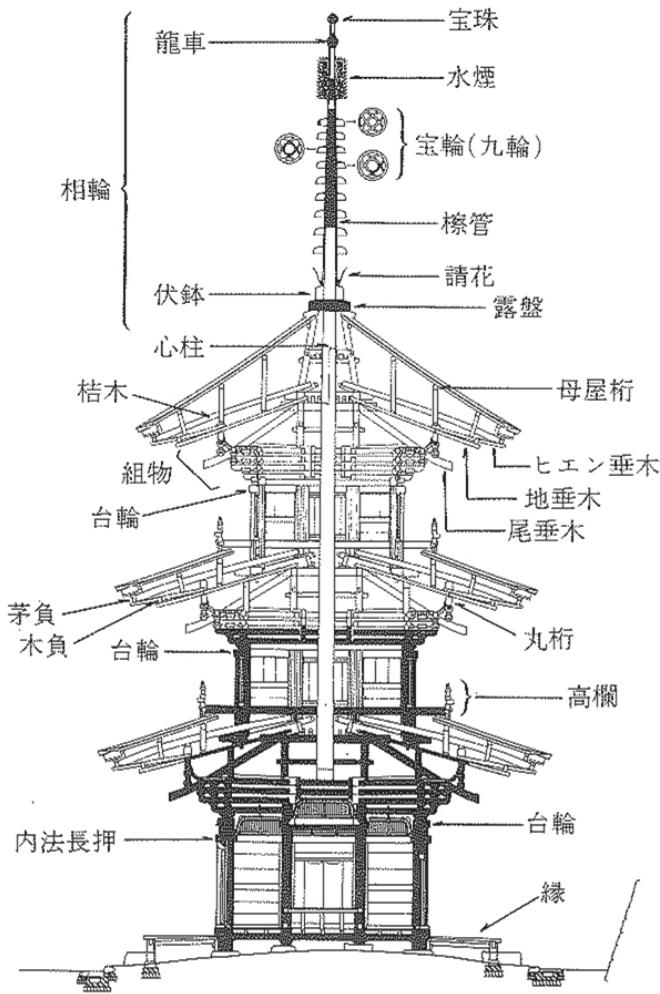


金剛輪寺三重塔(竣工正側面全景)

かになり、中門に続く廻廊で囲われた中に、中心に塔を建て、その三方に金堂が塔をとりまくように建っていたことがわかりました。また大阪の四天王寺は現在鉄筋コンクリートの建物になっていますが、昔からの建物配置をまもっており、やはり中門に続く廻廊で囲われた中に、中門を入るとまず塔があり、その後ろに金堂、講堂と一直線上に主要建築を並べています。また法隆寺は中門を入ると向かって左に五重塔が、右に金堂が並んでいます。このように塔は寺の中心的な建物であることがわかります。

塔とは、印度のスツーパーから卒塔婆・塔婆





断面図  
 黒塗り部分は当初の材料残存部  
 (相輪は永正17年改鋳のもの)



修理前全景

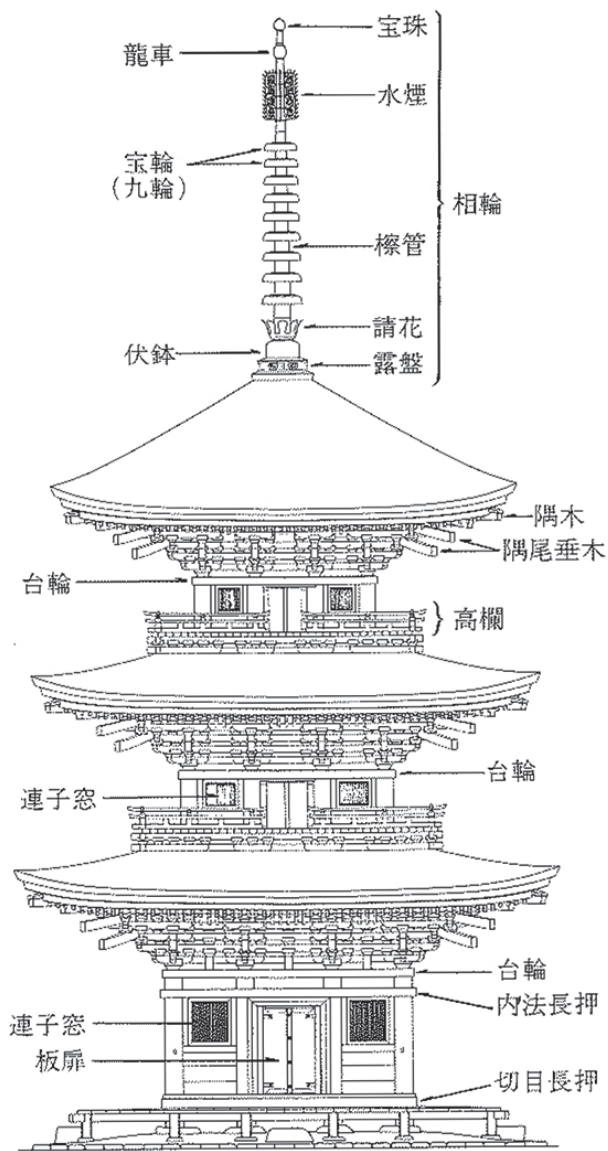
または単に塔というようになったもので、色々な本によく紹介されているサンチーのスツーパーは前1世紀のもので有名です。スツーパーは釈迦の墳墓です。釈迦の遺体は火葬され、その遺骨は分骨して各地にまつられ、わが国でも釈迦の骨であると信じることによって仏舎利を寺に奉安し、礼拝の対象にしています。このシリーズ(17)には崇福寺三重塔の心柱礎石内から発見された舎利容器について説明されていますが、これは実に貴重な考古資料です。サンチーのスツーパーをみると大きな饅頭形の墳墓の上に三つ重なった傘が立っています。この傘の部分が伸び上がって傘の数も増え、中国ではそれが楼閣建築と合体して塔建築ができ上がりました。それがわが国に伝わって現在見るような塔に発達したのです。

仏教伝来以来、寺院の建物の配置も色々と変化し、奈良の薬師寺では金堂の前方左右に三重塔が建てられました。また東大寺には現在塔がありませんが、奈良時代にはやはり2基の七重塔が聳えていました。平安時代には最澄(伝教大師)によって天台宗が、空海によって真言宗が伝来され、最澄は比叡山に根本道場を、空海は高野山に大塔を建て、それぞれに密教の中心聖地が定まりました。ここでは奈良仏教のように平地に廻廊をめぐるして、その中に金堂や塔あるいは講堂などを建てる整然とした建物配置はしていません。延暦寺は三塔十六谷といって東塔、西塔、横川に寺域があり、比較的風あたりの少ないところを選んで大きなお堂を建て、またそれぞれに塔が建てられました。

現在西塔には相輪様そうりんようといって相輪部分だけが地上に建っている塔があり、明治28年に再建されたものですが重要文化財に指定されています。(本シリーズ(12)参照)

#### 金剛輪寺三重塔

前置きが大分長くなりましたが、これから金剛輪寺三重塔について説明しましょう。金剛輪寺は愛知郡秦荘町大字松尾寺にある天台



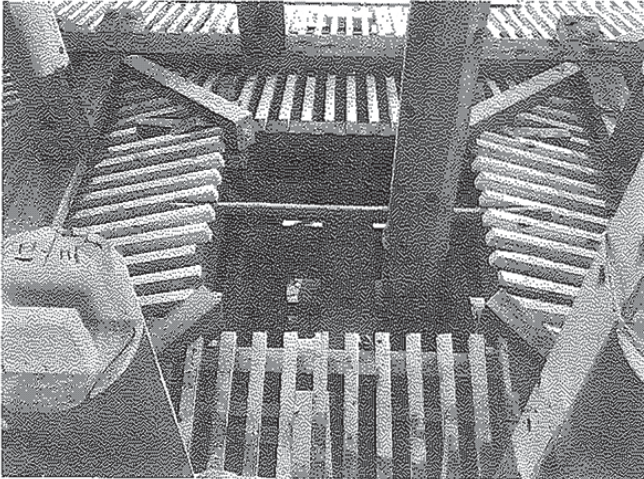
竣工立面図

宗の大寺で、西明寺、百濟寺と共に湖東三山と呼ばれています。百濟寺では惜しいことに塔は礎石を残しているだけですが、西明寺は二天門を入ると本堂に向かって右手の小高いところに、金剛輪寺では本堂に向かって左手の高い位置にそれぞれ三重塔が建っています。このように塔は自由な位置にあります。いずれもそれは二天門を入れてから仰ぎみることになります。二天門は仏法の守護神とされる四天の内の二天を安置するため名付けられたものですが、金剛輪寺では増長天と持国天が立っています。

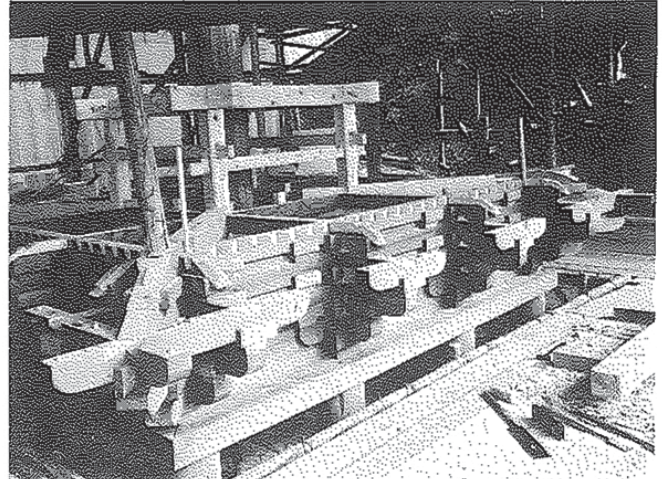
三重塔は昭和50年度から解体修理に着手し53年5月に復原工事が完了しましたが、修理

前は写真に見るように三重目を完全になくした、いわば骨組みだけの二重の建物になっていました。工事中にもこの塔ができた年代を証明する記録などは発見されませんでした。様式からみて南北朝時代(1333~1392)のものと考えられています。いつ頃このように荒廃してしまったのか、詳しいことはわかりませんが、天保3年(1832)に画かれた縮尺十分の一の図面には漢文で次のようなことが記されています。「この寺の三重塔は寛元4年に建てられ、天保3年まで600年になろうとしている。相輪から垂木や梁までこわれて傾きくずれがけてきた。光格住職はこの状態をじっと見ているにしのびず、これを修理することを発願し、まず大工成則に命じてこの図面を画かせた。天保4年春2月、僧亮照方明記」。この文中に寛元4年(1246)に塔が建ったとしており、また、寺には「三重塔待龍塔建立供養文」があって、それにも寛元4年の年号がみられますが、寺の記録と建物の本当の建設年代とは相違することがよくあります。さてこの図面に書かれた文により天保頃には三重塔が大分こわれかけていたことがわかります。また寺には永正17年(1520)の銘のある露盤と九輪などが保存されていて、これはこの塔の最初の相輪が駄目になり、永正17年に再鑄されたものでしょうが、この露盤にも大きな亀裂が入っており、塔上から落下したものと考えられます。天保以後も再々修理計画がたてられましたが遂に現代に至り、昭和47年に重要文化財に指定され、昭和49年度には復原工事をめざした調査工事を行って、完全に復原するめどがたちました。調査が進むにつれて、この塔は西明寺の三重塔よりや、時代は下るが、各部の構造がよく似ており、西明寺の塔と比較検討すると共にそれを参考にすることが最良の方法であることがわかってきました。この塔は西明寺の塔より約1割程大きいのですが、一重と二重では両塔の垂木の数が同じであり、三重の垂木も西明寺塔と同数とする





一重の垂木を並べた上に柱を受ける  
台を組んで二重目の柱を建てたところ  
(心柱はまだ横においてある)



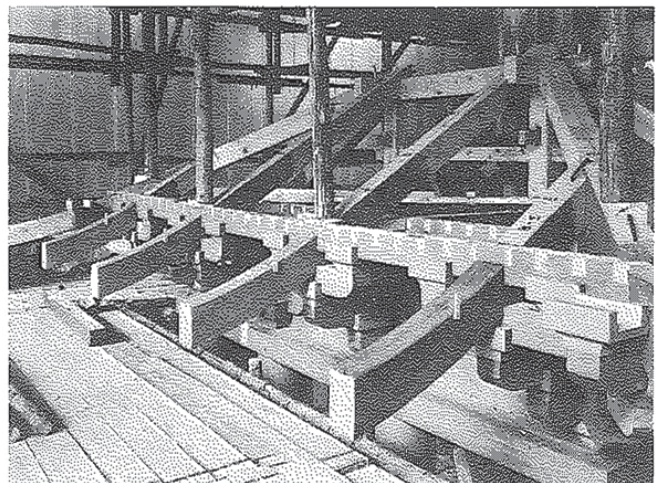
二重目の柱の上に組物を組立  
てているところ

のが最も良いことがわかり、各重の高さの比率もほぼ同じ数値を得ることができました。相輪は先にのべた永正17年のものを忠実に復原し、水煙は塔の周りの土中から発見された断片により福井県明通寺のものを参考にして作ったものです。

#### おわりに

重要文化財に指定された三重塔は全国で51基あります。各時代で特徴はありますが、すばらしい塔を仰ぎ見た時、その姿の美しさに深い感銘を覚えた人は多いと思います。この美しさは一重から三重にいたる各部の比率とその調和、軒や屋根の曲線など沢山の要素が総合されてでき上がるもので、簡単に表現することは難しいのですが、県内にも表に示すとおり7基の三重塔がありますので比較しながら鑑賞してください。

鎌倉時代から室町時代には社寺建築の技術



二重目の組物に尾垂木が組み  
こまれた状況

は極度に発達し、その時代の建物を解体修理などすると、細部まで計算された計画と施工ぶりに驚嘆します。またいずれの建物も厚い信仰心と優れた工匠の精根をこめた技と努力の結晶であることに感動を覚えます。

(成瀬弘明氏提供)

#### 滋賀県内にある三重塔

指 定 別	名 称	所 在 地	建 立 年 代	高 さ (メ ー ト ル)	屋 根
国 宝	西明寺三重塔	甲良町	鎌倉時代後期	20.09	桧皮葺
重要文化財	金剛輪寺三重塔	秦荘町	南北朝時代	22.12	桧皮葺
重要文化財	園城寺塔婆	大津市	南北朝時代	25.15	本瓦葺
国 宝	常楽寺三重塔	石部町	応永7年(1400)	23.30	本瓦葺
重要文化財	摠見寺三重塔	安土町	享徳3年(1454)	19.85	本瓦葺
重要文化財	長命寺塔婆	近江八幡市	慶長2年(1597)	24.35	こけら葺
滋賀県指定	徳源院三重塔	山東町	寛文12年(1672)	15.52	こけら葺